

「ねえ……光莉のおっぱい、いじって……」

言われるまま、光莉の小ぶりの乳房を両手で揉む。水着の上からでもはつきりとわかるほど、二つの乳首は硬く尖っていた。

「おっぱい、気持ちイイの……光莉、お兄ちゃんにおっぱい揉んでもらうときが一番幸せだよ……ああん、もっと……お願い、乳首もいじって……きゃふん！」

左右の乳首を同時につままれた光莉が可愛い悲鳴をあげた。乳房をいじられることにより、肉棒を包んでいた膣襪がさらに妖しく蠢く。

「うあつ、あつ、イイ、お兄ちゃん、光莉、もう、もう……ああ、あああッ！」

「くっ……」

ただでさえ狭い肉道が急激に締まった。いきなりの締めつけに、宗一の若いペニスが爆発する。

「あああ、あうっ、出てる、お兄ちゃんの、オマ×コに出てるうう！」

「ひ、光莉……うああッ」

「イツちゃう……光莉、お兄ちゃんのせーしでイツちゃうよお！ イクウ!!」

細い身体を小刻みに痙攣けいれんさせて、光莉が達した。そのままくったりと宗一の上に倒れる。

「ハア、ハア……」

熱い息を宗一の首筋に吹きかけながら、光莉は静かに目を閉じた。紅潮した顔に満ちた足げな笑みが浮かんでいる。

「お兄ちゃん……大好きだよ……」

「光莉……」

兄と妹はどちらからともなく口づけを交わした。やや力を失っていたペニスが再び硬くなったが、

「ごめんね、お兄ちゃん。次は明莉の番なの。光莉と同じくらい、気持ちよくさせてあげてね」

光莉が名残惜し（なごり）そうに腰を浮かせて肉棒を引き抜く。精液と愛液の混じった白い液体が、淫靡（いんぴ）に二人の股間を繋いでいた。

「へへっ、なんだかエッチだね、こういうの……」

「んもう、光莉お姉ちゃん、早く交代してよお！ 明莉もお兄ちゃんとエッチしたいのにー！」

光莉と入れ替わりに、今度は明莉がまたがってきた。明莉の水着の股間にも、同じように切れ目が入っている。光莉よりも陰毛が多いせいかな、スリットから縮れた毛が



はみだしているのが妙にいやらしい。

「うわあ……お兄ちゃんのおチン×ン、お姉ちゃんのエッチ汁と混じって、べつとべとだね……」

そう言いながら、姉の愛液の混じった粘液を面白そうに亀頭に塗りたくる。

「そ、そんなにされたら……あ……くっ」

「うわわ、お兄ちゃんの、なんかピクピク動いてるー!」

明莉の手のなかで、ペニスが苦しげに震えている。射精したばかりで敏感な亀頭をいじられるのは、たまらなく気持ちよかった。

「お兄ちゃん、明莉のおマ×コに挿^いれたいの?」

「……………」

「ダメだよお、ちゃんと言ってくれないと、エッチしてあげないからねー」

明莉は水着からこぼれそうな胸を宗一に押し当てながら、焦らしてくる。

「ねえ、したくないの? 明莉のグチヨグチヨのおマ×コに、おチン×ン挿れたくないのお?」

水着からはみだしそうな豊満な乳房を揺らしながら愛らしい義妹に囁かれては、もう抗^{あらが}う術はなかった。宗一は掠れた声で、ついに禁断のセリフを口にしてしまう。